

愛するということを知ることだ

梅村琴音

「言葉ですら、決してひとは分かり合えない」

これが、先日大きな衝撃を受けた内的発見であった。

ひとは、自分自身の五感、すなわち肉体でこの世界を感知している。これを突き詰めると、他のひとと同じ世界を生きられることはない、ということになる。自分が認識しているのはあくまでも自分の肉体を通して感じ取った世界であって、それを他人と共有することはできない。わたしは林檎の色を「赤」だと思っているけれど、隣の人は、わたしの感覚で言うところの「緑」に見えているかもしれない。けれど、お互いその色を「赤」と呼ぶと教えられてきたから、二人とも「赤」と言っているだけかもしれない。しかしこれを知ることが、肉体を持って生きている限り不可能だ。脳みそだけ取り替える、なんてことはできないから。

そうすると、たくさんひとが生きているこの世界において、同じ世界を「認識」しているのは自分一人以外にいないことになってしまう。人々の間で差異や齟齬が生じてしまうのは、ある意味当然のことだ。

わたしは、この僅かずつの「ずれ」を、どうにか小さくしようとする営みが会話というものだと、そのために存在するのが言語というものだと信じてきた。あなたとわたしが見ている世界、それを完全に一致させることは不可能でも、なんとか重ね合わせたい、分かり合いたいという、人類の想いの結晶なのだ。

しかし、その「言葉」すら、相手と一致し得ないと気づいてしまった。

ある単語があったとして、その辞書的な意味はある程度相手と共有できているかもしれない。しかし、そこにどのようなニュアンスを持っているか、感じているかというのは、そのひとのそれまでの人生経験に裏付けされたものだ。どこからどこまでを「オレンジ色」と表現するのか。世界には虹を七色という言語もあれば、三色という言語もあるのはなぜか。「嬉しい」と「楽しい」の境界線はどこか。あるメッセージを「怒っている」と捉えるか「真面目だ」と捉えるか。こういった、言葉の上にながら言葉の存在を下支えしているものは、五感と同じように、個人に依ったひどく曖昧で不安定なものだった。同じ言葉を同じ意味で使うためには、その人と全く同じ人生経験をしなければならぬ。すな

わち、不可能。

五感の無力さを、本当の意味での共感が存在し得ないことを知り、それを埋めるために存在するのだと信じていた「言葉」すら不完全なものだと知った。人間は、いやこの世界は不完全だと、ようやく分かった。なぜそうなのか、どうしたら満たされるのか、それを知るためにどこまで突き詰めても、「不完全である」という事実が輪郭をはっきりさせるだけだ。

全知全能の神がいると仮定して——そして我々人間を含むこの世界を作ったのは彼だと仮定して——そいつは何を思っこんな不完全体を作ったというのだろう。神たりえる存在なら、完璧なものを作れば良いのに。ならばその「不完全さ」こそが「完全」なものなのか、もしくは、不完全な、欠けた部分を埋めようとする営みがあつて、それを内包して「完全」ということなのか。

悪いが、この世界はそんなに甘つちよろいものじゃない。不完全なもので成り立つような単純な構造をしていない。複雑で、緻密で、すべてのつながりが完璧に機能してようと成り立っている、少なくともわたしの眼にはそう映る。しかし、視点を変えれば全てが不完全なものにも見えるし、不完全な存在を許す甘さや余裕も確かに存在している。この状況が、神とやらの作りたもうた完璧な世界だというのなら、きつと、「不完全という完全」「未完成という完成」という、言い尽くされた陳腐な言葉に結局落ち着いてしまうのだ。わたしは、言葉のあるこの世界を愛している。愛したいと、いや、愛させてくれと思っっている。すべての出来事、物事に意味があると信じている。あってくれと願っている。だいいちわたしが、数々の言葉によって助けられてきたのだ。わたしの中に積もっている大切な言葉ひとつひとつ、それらに意味がなかったとは思えない。思いたくも、ない。

わたしは乞い願う。完璧とやらからは程遠いわたしという存在を、そこから紡がれる拙い言葉を、この世界の隅にでいいから置いておくことを許してくれと——そうではなくては、この世で生きていく理由も意味もなくなってしまふ。ならば、藻掻いてやろう。不完全な世界を、未完成なわたしを知り、認め、愛し、せめてものよすがにしていこう、と、ありきたりな言葉を紡ぎ直す。そのために、言葉というものをもっと深く知り——きつと知ったところで、その不完全さをまざまざと見せつけられるだけなのだろうけれど——ひとつずつでも何らかの手がかりを掴めたら。わたしなりの「ことば」に出会えたら。そう思っ叩くことにしたのが、言語学の門扉だった。学ぼう、と、初めて本気で思った。

言語学。無駄、よし。机上の空論、結構。どんなに学問を突き詰めようが、結局実生活に生きるかと言われると怪しいことは百も承知だ。

それでも、わたしには信じていたい「言葉」がある。これもまた、全く同じ意味で伝わ

愛するということを知ることだ

ることはないも知っていても。

「『勉強というものは、いいものだ。(中略)覚えるということが大事なのではなくて、大事なのは、カルチベートされるといふことなんだ。カルチユアというのは、公式や単語をたくさん暗記している事ではなくて、心を広く持つという事なんだ。つまり、愛するということを知る事だ。』」(太宰治『正義と微笑』より)